
魔力を使う魔法の反逆者

間宮 愁死

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔力を使う魔法の叛逆者

【Nコード】

N7401W

【作者名】

間宮 愁死

【あらすじ】

彼は転生させられた。しかし彼は原作を知らず、更に魔法使いとか言う理解できない化け物にはなりたくないと言い放ち。人の概念から離れない程度の能力をもらい生れ落ちる。しかし知らなかったとはいえ世界は残酷にも牙を向く。

プロローグ 1

< 申し訳ございませんでした。 >

視線を上げてても下げても、はたまた左右に回転させても何も無い
畏怖を感じるほど真っ白な空間。

そこで、頭に響いてくる男とも女とも認識できない声。

(え??? ナニコレ???)

真っ白な空間に1人だけで立っているとも浮いているとも形容できる
学生服を着た少年は突然の出来事に困惑しながらも必死に状況を
理解しようとする。

(どういうことだ!?)

・・・確か・・・俺は今日いつも通りの時間に家を出て学校
に向かうため電車に乗ったら、その途中で人身事故が有ったから「
これは遅刻確定だな」と思い、遅延乗車券を貰いに行きながら「な
んでこんな時間に自殺するんだよ。てめえ一人のせいでの沿線
を利用する人たちに迷惑がかかることぐらい考えるよな。」とか文句
を言いながらも一方で「もしかして自分が此処にいたということ
を多くの人に知ってもらいたかったのかもな。」とか考えながら「
まあ、自分じゃねえ他人の心の中なんて解かるわけねえな。」とか
思い、考えるのをやめ「平和ボケしたこの国でいつも通りポケーと
無関心に生きてれば人生なるようになるだろ」と枯れたことを考え、
その通り何も考えずにポケーと電車の動き出すのを待って、そこか
らはいつもと変わり映えのない日常が続いていたはずだ。

確かにそうだったはずだ。でも今、俺はわけのわからない空間にい

る。

・・・とすると・・・夢か？)

少年はそう結論付けるが、まだ半信半疑なため親指の皮を思いつきり噛みちぎってより強い痛みを自分に与えてみる。

(いつーンッ~~~~!!)

すると噛みちぎった所から痛みがはしる。

そして痛みが落ち着いてきたところで自分が噛みちぎった所を目視してみる。

(・・・痛みは感じるし、血も出ている。

つてことは全く記憶が繋がらねえが、此処は夢ではなく現実だ。)

痛みと血が出ているという状態から此処が現実だとわかり、少し落ち着く。

<あの〜。もう話してもいいですか？>

混乱してすっかり忘れていたあの男か女かわからない声が再び頭に響く。

驚きあたりを見回すが何も見当たらず、何処を見ても白が永遠に広がっているだけ。

そのため不安が増す。

そこで不安を解消するため彼は声を張り上げる。

「おーい。誰かいるのかー？」

そして耳を澄ます。

するとまた頭に声が響く。

<すいません。姿は見えないと思いますが、わたくしは水先案内人の者です。>

(ッ! ! 落ち着け、此処は現実だが、わけのわからん空間なのは確かだ。だからそんなに驚くな。落ち着け。落ち着け。そして話しかける。)

驚き、更に姿が見えないということに対する恐怖を感じたが、状況を把握するために質問をする。

「. こ、こ、こはどこなんだ？ そして、なんで俺はここにいるんだ？」

声は恐怖や不安から擦れていたが、なんとか発する事が出来た。すると親切に説明が返ってきた。

<ええつとですね。此処はいわゆる黄泉であって黄泉でない、現世であって現世でない、三途であって三途でない、という曖昧であやふやなよくわからない空間です。で、貴方はこの本来はないバグ空間に落ちてきた『ある意味不幸であり幸運』な人と言うことです。そして本来ならないこのバグ空間に落ちてきたために貴方の存在は現世にも黄泉にもはたまた三途にも有りません。消えました。という事であなたを違う次元世界『ネギま!』に『上書き』させることに決まったそうです。>

その説明はあやふやでよくわからないが、とりあえず彼は『ネギま!』という世界に『上書き』されるらしい。

「・・・・・・・・・・・・あ！？ 『ネギま！』 って何だ？？
『上書き』 ってどういうことだ？？ 転生するってことか？？」

「ええと、そうですね。 『ネギま！』 とは地球上に一般人と同じように妖怪や魔法使いやサイヤ人的な存在がいるような世界です。そして『上書き』 とは正確に言えば転生と違いますけど、大まかなイメージとしては『記憶を持って転生する』 そのようなものですね。>

「なるほど！！・・・・・・って、ざけんじゃねー！！ 結局、転生みたいなものってことは人間以外の存在になる可能性もあるってことじゃねえか！」

「いえ、そこは大丈夫です。 あなたは『特例』 なので人として上書きする上にさらに条件を選ぶことが出来るらしいです。ですから、気と魔力の量を最大限にしてカツコイ容姿の人にしてくれとかも可能とか。 流石に世界を壊すような力をくれというのは無理らしいですけど。>

「それなら気も魔力もいらねえ。 平穩に過ごせる一般人に転生させてくれ。」

「それは出来ません。 最低限原作が始まるまでは生きていてもらわないといけならしいので。 それなりの力は持つてもらいます。>

「はあ、おれは魔法使いとかサイヤ人とかそんな化け物にはなりたくないの。 Do you understand? 」

「わかりました。 それならあなたの考えを読んであなたがギリギリ許容できる範囲の人間的能力を持たせて転生させます。>

「待ってくれ。容姿はかつこ良くもかつこ悪くもない、ドコからどう見ても一般人って容姿にしてくれ。」

<わかりました。それでは、始めます。>

その言葉を最後に床が七色に光り出し少年の体は徐々に沈んでいく。

(ああ、なんだか気持ちいいな。ぬるい温泉につかっているみたいだ。……………なんだ……………か……………寝む……………
……………なっ……………て……………)

そして少年の頭が沈み、眠ってしまう前に水先案内人の咳きが響く。

<哀れな犠牲者よ。恨むのなら、神を恨みなさい。それでは、貴方の第二の人生に幸あらんことを。>

そこで少年の記憶は途切れた。

プロローグ 2

目を開くとあたり一面は火に覆われ、自分以外はだれ一人残らず死んでいる。

いや、正確には、一人の化け物によって、燃やされ、穿たれ、裂かれ、そして惨殺されている。

そしてその化け物が自分に近づいてくる。

大きな杖を持ち、真っ白なローブを血で赤く染めて、赤い炎を従わせながら

そして化け物が自分の頭に手をかざす

そこで彼は飛び起きる。

不快な汗が全身から発せられ、呼吸が荒くなっている。

「ハツ、ハツ、ハツ、ハツ、ハツ、ハツ。」

そこで乱れた呼吸を整えようと懸命に息を吐く。

「クソツ。またか。」

落ち着いてきて、うなされていた悪夢の内容を思い出そうとするが霧がかかったように白く塗りつぶされて思い出せない。

しかし、恐怖と後悔と懺悔と嫌悪と安堵を感じた事は覚えている。

そのため、どうしてこの感情になったのか見当がつかないためイライラしてくる。

「……………煙草でも吸うか。」

気を紛らわそうとして彼は煙草を吸うことにする。

ベランダに出て、火を付け、煙で肺を満たし、吐き出す。

「……………ふう。」

ベランダの鉄の棒に手を付き、一息つき彼は考える。

（俺は転生者だという事は覚えている。しかし、血生臭い荒野にいたまでの事は覚えていない。此処に何か重要な事があるはずなんだが……………わからない。情報が少なすぎる。俺が起き上がったときにはもう土地は荒れ果てていて手がかりになりそうなものは何もなかった。一つだけ確実な事がある。俺をこうしたのはそいつか、そいつ達は、魔法使いであろうということだ。

だから俺は記憶を探す為に魔法使いの聖地である麻帆良に来たんだがな。

だが、迂闊な行動は厳禁だ……………最悪殺されるかもしれないしな。）

確かに彼の能力は人間的能力だし、「ヒト」と言う概念からは離れてない……

~~~~~

・自分が考えた通りに寸分の狂いなく体を動かせる能力（人間の体の構造上ありえないことは出来ない。）

・感情が高ぶると脳のリミットが外れ凄い力を出せる能力（力は出せるが筋肉が断裂したり、骨折したりする。いわゆる火事場の馬鹿力）

・とてつもなく集中すると周りがゆっくりに見える能力（このとき自分の動きもゆっくりになる。いわゆる武人の極み・走馬灯）

・高速演算能力（60桁×60桁の計算さえ1秒もかからずに計算できる）（これは一番上の能力の付属品。）

~~~~~

その為、目的がばれば最悪殺し合わなければいけないかもしれない。

しかし魔法使いや、サイヤ人を殺すためには気や魔力を使った攻撃しか有効でない。

そして彼は一般人程度の魔力と気しか持っていないため、効率よく気と魔力を使うために攻撃方法を編み出した。

それは心臓を気で強化し、心拍数を上げ、超人的な動きを可能にし、攻撃を当てる所を魔力で強化すると言う出鱈目な方法であった。

なぜなら強化したところ以外は人間の範囲に納まっているためである。

心拍数を上げたところで血流の流れる血管は強化されていないため何時壊れてもおかしくないし、魔力を集めているところ以外は人間の攻撃で壊れる。

そんな欠陥だらけの方法だった。

しかし、この方法しか少ない魔力と気を効率よく使う方法がなく。自分の特殊能力と組み合わせる上で、リスクとメリットの関係上これを使わざるを得なかった。

そして数多の戦争と言う名の殺し合いの中で技を繰り返し、繰り返し、繰り返し、磨き上げ続けた。

その結果、彼はこれを完成させた。

（おっと、いけないな。これ以上は考えると物を壊しちまう。酒でも飲むか。）

そう思い、彼はベランダから部屋へと戻る。

鉄の棒に手の跡を残して……

そして夜は更けていく。

原作との邂逅（表）

夜が明け、朝になる。

朝になったと言うことは学生ならば学校に行かなければならない。

そのため彼は酒の入った状態で、制服を着て半年経っても未だに慣れない学校に向かい部屋を出る。

そのまま慣れないと言っても半年で体が覚えてしまった道を何も考えずに歩く。

運悪く不定期で開催されるストリートファイトの現場に遭遇し、流れ弾（者）が飛んできてしまう。

しかし酒の入った状態のため、反射的に昔の感覚で行動してしまう。

そう、流れ弾をそこらへんにある物（者）で防ぐということをして……

そして本能の赴くままに行動し、投げれ弾を飛ばした相手のマウン
トポジションを取って、ナイフを突きつけるということをして……

そこまで行動してやっと自分の状況を理解する。

（しまった。迂闊だ。こんなことで目をつけられたら行動がしにくくなる。）

そんな思いが彼の心中に渦巻く中、一人の男性の声が聞こえてくる。

「そこで、何をしているんだい？」

その言葉にほとんどの者は言葉の発生源に目を向け、人壁が割れだす。

その瞬間にナイフを袖に隠し、持っていた手品用のものに変える。

そして人壁が割れきり、自分と声の主の間には何もなくなった。

「・・・で、君達は何をしているんだい？」

少し間を空け、学園広域指導員である、メガネに無精ひげを生やしたダンディなおじ様　　タカミチ・Ｔ・高畑が問い直してくる。

タカミチが見た状態は　　女子生徒相手にのマウントポジションをとって光物を突きつけている男子生徒　　である。

そのため男子生徒はすぐさまマウントポジションから退き、説明を始める。

「ええっと、あの、学校に行こうとしたらストリートファイトの現場に巻き込まれまして、止めようと思い、主犯のこの子を倒しました。」

「では、その手に握っているものは何だい？」

「これですか。これはマジックが趣味でしてただのおもちやです。」
そういつて、ついさっき出したナイフの先端を押し、刃をグリップの中に入れる。

「そうかい。では正当防衛ということだね。」

「はい。ややこしくしてすみません。」

「そうかい。君も反省しているみたいだし、**嚴重**注意だけで済ませ
ておこうか。学生証を見せてくれないかい？それと古非君、クーフエイストリー
トファイトは放課後だけと約束しなかつたかい？」

「うっ……、ごめんアル。つい挑戦者が強そうで我慢できなくて。」

マウントをとられていた中国系の少女　古非は怒られ、シユンと
落ち込む。

が、さっきのことを思い出し、

（不意を衝かれたとはいえ倒された相手だ。きっと強い相手だ。）

「それより勝負アル。今度はさっきみたいに行かないアルね。」

すぐに再戦を申し込む。

しかし、すぐさまタカミチに止められてしまふ。

「古非君。さっき言ったばかりだろう？」

言葉とともに発せられた威圧感が即座に古非を謝らせる。

「う、ごめんなさいアル。う、嘘アルから。」

そして、タカミチは男子生徒の学生証を確認し、うやむやになったこの場を解散させる。

解散させ人が減ったところでタカミチはタバコを取り出し火をつけ、さっきの男子生徒について考える。

（洞^{ウロ}明^{アシト}人君か。彼はそうとうの腕の持ち主なんだろうね。古非君が不意を衝かれたからといって一般人相手にはマウントなんてとられないだろうからね。注意人物として気にするか。今後、他の先生にも聞いてみよう。）

少なくなったタバコの火を消して携帯灰皿にしまう。

そして担当である教室の女子中等部のある校舎に向かって歩き出す。

さっきのやり取りですっかり目が覚めた男子生徒　洞明人は男子高等部の校舎に向かいながら思考する。

（やっべ。つい反射的に行動しちまった。こりゃ少し警戒されたかもな。今後の行動はより注意しないとな。しかしあの教員は強

い。デスメガネと呼ばれるのも頷けるな。」

明人はあの威圧感に噂のデスメガネの鱗片を垣間見た気がした。

（とりあえず、行動としては、図書館島で文献を漁るしかないか。めぼしい物は大体読んだんだがな。仕方ない。）

そして今後の行動方針を決める。

すると後ろから馬鹿でかい声で明人の名前を連呼しながら近寄ってくる浅黒い東洋系の顔をした男子生徒。

「おーい！！アシト！！アシト、アシト、アシトー！！」

そしてそのまま明人の首に手を回してた。

「うわ、酒臭っせ！ 鼻がもげる。」

が、この言葉とともに手を離す。

そして問いかける。

「おまえ昨日どれだけ飲んだんだよ。」

「・・・ウイスキー1瓶とテキーラ3杯と・・・あとはラムも飲んだな。」

明人は少し考え昨夜飲んだものを思い出して口にする。

その量に呆れながらも、彼は忠告する。

「飲みすぎや。いい加減止めろや。」

「うつせ。・・・酒は止められねえよ、止められるかよ・・・」

しかし、明人は一蹴し、ボソツと漏らす。

そして切り替えて言う。

「それにお前しか気づかねえよ。」

そう。この男子生徒とは昔からの仲で、特殊体質として視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触覚いわゆる五感が鋭い奴である。そのため些細な匂いでも気がつく。

そのため、彼としては真剣に止めて欲しい。

「だが、俺の鼻のため止めてくれ。」

「諦める。人間の体はそんなに柔じゃない。」

止める気がない明人は共有の実体験をもとに適当に諭す。

『実体験』それも相まって彼は苦々しい顔をするが此処で屈するものかと反論する。

「ふざけんな。」

しかしそれも予想外の肯定で返される。

「あ、そう。だったら止めてやるよ。」

「ただし、俺に勝てたらな。」

条件を付け足して。

彼は肯定を聞き、「おっ？」と思ったが、付いてきた条件が無謀すぎて諦めて折れることにする。

「へえ？……ハア、我慢する。」

「で、さっきの戦闘はなんだったんだ？」

「ああ、あれか、あれは酔って反射的に主犯を倒しちまった。」

「そういうことか。って馬鹿。だったら余計に酒を止める」

「止めるかボケ。」

「……はあ、ってことは目立った行動は厳禁なことだよな。」

「どうせ。お前は目立った行動なんて出来ないだろうが。」

明人の皮肉の利いた言葉は彼の心に致命傷を与える。

感覚が鋭いといっても日常生活のうえではこの上なく不便なのだから。

耳がよすぎて雑音が全て聞こえ、隣の授業すら聞こえる。

さらに敏感肌なため蚤や埃が体に触れるのが気持ち悪いため、いつ

も部屋は清潔にしておかなければならない。

舌がよすぎるため添加物の入ったものは食べられない。等々。いろいろある。

さらにそれ以外はなんら人間と変わらないため、自立とうとしても気狂いか病人にしか見えないのである。

なんと可哀想な奴だろう。

原作との邂逅（表）（後書き）

遅れましたが次話投稿です。

ISとあるも投稿しました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7401w/>

魔力を使う魔法の反逆者

2012年1月6日00時46分発行